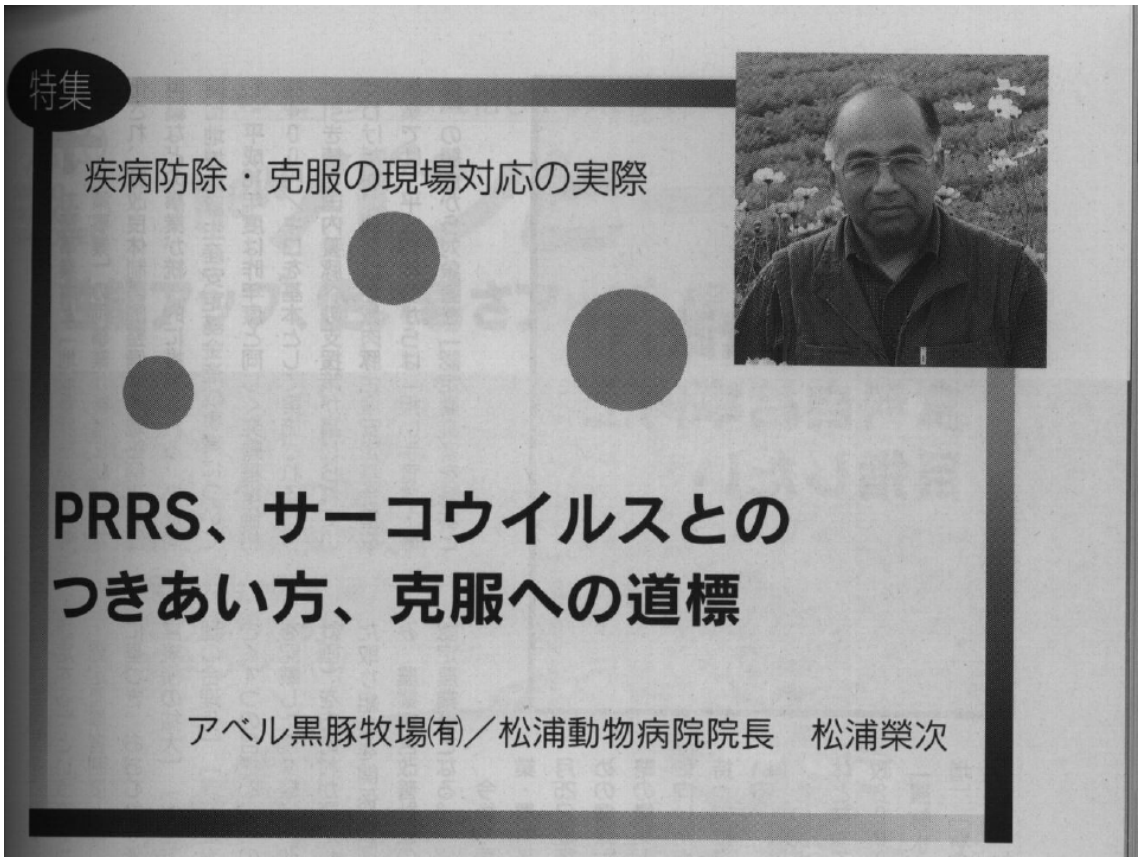

九州養豚技術研究会（事務局・アベル黒豚牧場㈲／松浦動物病院、宮崎県都城市早水町）主催、豚々塾、共立製薬㈱、フロンティアインターナショナル㈱の協賛による第５回研究会が２月２２日、都城市のホテル中山荘で開かれ、米国パデュー大学名誉教授でレイルスプリッター飼料研究所顧問のバド・ハーモン博士が、「哺乳子豚の最新管理技術」と畜産衛生環境改善用資材「スタローサンＦ」の特長や使用試験の結果などについて講演（講演概要は本誌２００６年４月号に掲載）。またアベル黒豚牧場㈲／松浦動物病院の山崎伸一氏が、豚のお灸について説明、同牧場社長で松浦動物病院院長の松浦榮次氏は「ＰＲＲＳウイルスとサーコウイルスとのつきあい方、克服への道標」と題して講演した。さらに地元、宮崎県立都城農業高等学校畜産科の東佳寿教諭が、ハーブ投与による増体、肉質などへの影響についての試験結果を報告した。本稿では、その中から松浦榮次氏の講演概要を紹介する。（編集部）

暑くないように、寒くないように、臭くないように

全国的にＰＲＲＳ、ＰＭＷＳ（離乳後多臓器消耗性症候群）、ＰＲＤＣ（豚の呼吸器複合病）、サーコウイルス、ＡＰＰ（アクチノバチルス）、大腸菌症、グレーサ病、サルモネラ症、ローソニア、ＴＧＥさらにはスス病などさまざまな病気が発生しており、出荷頭数の減少が顕在化している。

こうした状況から、病気がまん延している地域から病気のない地域へと農場を移転する傾向は徐々に強まっているが、農場の移転はもちろん容易なことではなく、既存の場所で生産を続けざるを得ないところが大半である。

養豚における心掛けとして、まずは「豚に感謝する」ということが大事だと思うが、さらにＰＲＲＳやサーコウイルス、オーエスキー病、大腸菌症などが浸潤してしまえば、それらと戦っていくため、この気持ちを基本とし、豚が暑くないように、寒くないように、臭くないように、徹底して管理をしていくことなどが肝要である。さもなければ、既存の農場を閉めて人里離れた場所でＳＰＦ養豚を営むしかない。

養豚における心掛け
●豚に感謝する
・豚は命を捨てて私たちを守ってくれる
●暑くないように、寒くないように、臭くないように
・清潔な身体を保ってやろう
●病気をさせない、苦しくないように、痛くないように
●たたかない、蹴らない、投げない
●おいしいエサを、おいしい水を
●十分な生活空間を
●豚にとって良いと思ったことは、まずやってみる

ＡＩ／ＡＯの徹底、馴致は中途半端は禁物

具体的な対策としては、まずは種豚について先述した疾病について検査し陰性の豚を使う、あるいは自家育成していくことが先決である。
それから母豚からの垂直感染をいかに防ぐか。また水平感染については、接触感染、空気感染、飛沫感染（くしゃみ、咳、ふん尿など）、飲水感染、ＡＩ（人工授精）感染、衛生害虫（ネズミ、ハエなど）や鳥類・ほ乳類（人も含む）による媒介があり、オールイン・オールアウトを徹底し、人、豚、飼料、衛生害虫、車、ピット、空気などの管理を徹底する。そしてさらに以下のような管理が重要である。

●清潔な飲用水（細菌、ウイルス、亜硝酸塩などのチェック）
・確実に飲めるような水圧と吐出量
●温度・湿度・換気のコントロール
・暑さ・寒さの防止（日齢に応じた適温）
・乾燥防止（日齢に応じた適温）
・隙間風対策
・豚舎外壁（カーテンを含む）の遮断性
・屋根・天井の断熱性
・寝冷え・腹冷えの防止（豚舎内・豚房内温度の区域差チェック）

馴致については、獣医師などによく相談する必要がある。そしてふんだけでやるのか、ふん尿でやるのか、後産（胎児胎盤）を使うのか、あるいはＰＲＲＳやサーコウイルスを発症している豚の血液でやるのか、さらには発症している子豚を殺して内臓を切り刻み，それを母豚に食べさせるのかということになる。
何カ所もの農場でこうした方法で馴致を実施し、大きな効果をあげている。馴致を始めたら徹底して継続していかなければならない。そうすることで非常にきれいな状態が維持

できるが、管理獣医師とよく相談して実施すべきである。
　馴致については、内容・方法を決めてマニュアル通りに実行し、とにかく中途半端は禁物である。徹底馴致の方法としては、自家育成豚なら、コマーシャル豚群との同居飼育を行い、９０日齢で選抜し、分離飼育する。
　導入豚なら、隔離豚舎で観察飼育を行い、検疫終了後に隔離下で馴致する。既存の種豚群との同居下での馴致は絶対にしてはならない。

隣接房に遮断壁、消毒の仕方も工夫次第

　隣接房に遮断壁を設けること。例えばプラスチックパネルなどで接触を遮断することだけでかなり効果がある。
　それから温度・湿度の管理、農場・豚房・豚体の消毒。消毒については蒸気消毒、消毒液、石灰消毒、ホルマリン燻蒸、熱水消毒などがあるが、連続飼養方式における消毒は創意工夫を重ねて徹底的に実行すべきである。
　また使用回数や濃度、量が問題になってくるので、例えば、１０００倍などと書いてある通りにやって効かなければ、２５０倍、１００倍にしたらどうなるかやってみればよい。
　ＡＰＰの被害がかなり出ていたある農場を調べてみると、ＰＲＲＳが先に動いていることがわかり、その後、通常５００倍で使う逆性石けん消毒剤を１００倍で使ってみると、農場は非常にきれいな状態になった。つまり消毒の仕方も工夫次第である。ただし、必ず小規模で試用してみて、豚に健康被害がないことを確認してから実行してほしい。
　湿度のコントロールに関しては、まず空気を暖めて舎内に取り入れようということで、ストーブを置き、その上でお湯を沸かし、それをダクトで豚舎全体に送るという工夫を実際に行ったが、非常に効果があった。さらに湿度を保持するために、豚舎の通路にオガコを敷き詰めた。

子豚の「寝冷え・腹冷え」を徹底防除

　温度のコントロールの実例としては、二重カーテンの間に３０ミリの断熱材を入れることで、断熱効果が高まり、化石燃料の使用量は大幅に減った。
　また、豚房の温度が２５℃、２６℃で管理していても、ピット内は１５℃、１６℃程度しかなく、冷たい風をどんどん吸い上げて、この風が寝ている子豚に当たり、寝冷えをして病気を起こすことになってしまう。そこでスノコ面をふん尿の「落とし穴」だけを残して、ゴムマットやコンパネで被ってしまったり（写真１）、スノコとセメント床面の間に「防風壁」を造ったり（写真２）、子豚の寝床スペースを板で囲ってオガコを１０センチ以上敷き詰めてみたり（写真３）して、子豚の「寝冷え」「腹冷え」を予防してみたところ、ＰＭＷＳ症に対する予防効果がみられた。
　子豚にとって、「寝冷え」「腹冷え」は万病の源である。ＰＭＷＳ症やＰＲＤＣ症に悩んでいる農場は、「馴致」と、「オールイン・オールアウトの理論」「消毒法の理論」をよく勉強し、「豚舎構造の理論」をよく学習して、化石燃料の使用量を減らす努力をしながら、子豚の「寝冷え」「腹冷え」の予防を念頭の中心において日々の飼育管理を実践していただきたい。
　ＰＭＷＳ症やＰＲＤＣ症の発症予防に当たっての大切な心掛けは、「人間の都合」ではなく、「子豚の都合」の観点から、子豚の「寝冷え・腹冷え」を徹底的に防除するのだという決心と実行にあると思う。

写真 1

写真 2

写真 3